

No.96 2014.10.8 ^{あおじゅかい} 会報「青樹会」 会報事務局 〒252 0201
中国内蒙古沙丘・草原緑化研究会 相模原市中央区上矢部 2-14-6
代表 押田 敏雄 押田 敏雄 方(事務局長代行)
(Tel & Fax 042-776-2040) (Tel 042-769-1641 Fax 042-768-2612)
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~aojukai/> e-mail:ryokka@azabu-u.ac.jp

1. 「2014 夏ツアー帰国報告会」を開催



去る 8 月 30 日(土)の 15 時から、東京駅八重洲倶楽部において、2014 夏ツアー帰国報告会を開催しました。大規模な改装のために休業中であった八重洲倶楽部は見違えるような施設に生まれ変わっていました。

今回の参加者は神尾(由)、堀川、中村(民)、中村(千)、西、野上、石川、窪田(定)、窪田(誠)、立野、中川、樋川、押田(照)、金澤(和)、押田(敏)の 15 名でした。窪田(定)は窪田さん、窪田(誠)は窪田さんの御子息で都内在住の誠司さん、押田(照)は押田先生のご婦人の照子さん、金澤(和)は日洋航空専務の金澤和子さんです。なお、夏のツアーには参加されましたが、報告会に不参加だったのは、岡田さん、都築さん、近田さんでした。

夏ツアーの報告は、いつものように、押田先生によるスライドを使った「ツアーダイジェスト」です。数多くのスライドを使った報告の後には夏ツアー参加者によるツアーの感想発表、ついで、本日の参加者の近況報告がありました。そのあとは、20 年に亘って現地へのツアーを行ってきたことを振り返る思い出の交歓会でした。

報告会後の恒例の懇親会は「日本海庄や」で行ない、楽しい時間を過ごしました。取敢えず、現地へのボランティアツアーは幕を閉じ、今後は会報の発行、年に 2 回程度の会合などを継続する予定です。なお、西さん、野上さん、中村(民)、押田先生が中心になって、会の 20 年の足跡のような資料の編纂・作成を行うことになりました。



左から 金澤、樋川、中川、神尾



中村(千)、西



野上、石川



中村(民)、立野、押田



左から 窪田(定)、窪田(誠)、堀川



日本海庄や にて

2. 2014年夏ツアー旅行記 最後の「内蒙古・緑化支援とふれあいの旅」



近田康二

8月3日 整備された高速道路で移動

「ワァー蒸し暑い、東京と変わらないじゃないの」、「北京って、こんなに立派な空港だった?」、「なんだ、このどんよりした空は!! これってPM2.5?」

北京空港に降りた参加者の感想だ。50回近く訪中した人、久しぶりに参加した人、初めて参加した人。ほぼ満席のCA-182便は定刻より5分遅れで到着した。

羽田出発組の11人に加えて、先発の野上さんと関西空港から飛び立った浦井智司さん(赤峰学院日本語教師)が合流、総勢13人が今回の参加者だ(参加予定していた日洋航空



の樋川さんは身内のご不幸のため急遽取りやめになった)。

「20年にわたっての烏蘭敖都村での緑化活動は一定の成果をあげた。中国の飛躍的な経済発展、沙地の地方政府主導の大規模緑化が進展している。その一方で日本側の会員の高齢化が進む状況のなかにあつて、今夏のツアーを最後にひと区切りつけたい」(押田先生)という。

私は10年ほど前から青樹会の活動について押田先生や中村(民)さんから聞いて興味をもっていたが、なかなか参加する機会に恵まれずにいた。初めて参加したのは2009年春。続いて、その夏には後半の「ふれあいの旅」だけに加わったことがある。今回で最後となると、万難を排しても参加せねばと決意。1週間の時間をつくるのに苦労し、前日まで仕事に追われ、旅支度をしたのは当日の朝になった。

北京に到着後、マイクロバスに乗り込み18時40分に出発。京承高速道路で北へ約200kmの河北省承德市に向かう。今夜はここまで。明日は赤峰市まで200km、さらに烏蘭敖都村まで150km、合計350kmの自動車移動となる。

22時前にホテル「雲山飯店」に到着。機内で出された食事はすべて平らげたものの、量・質とも満足感は得られず、かなりの空腹状態。ホテルにはすでに20種類近くの料理が用意されていた。「味が濃い」、「辛い」、「この食材は何だ」と、なんだかんだ言いながら円卓を囲む。

「今日は遅いし、皆さんお疲れの様子なので、自己紹介は明日にしましょう」(押田団長)ということで、23時までそれぞれにそれぞれの部屋へ。なぜか部屋の片隅に全自動のマージャン卓がある謎めいた部屋だったが、深夜だというのに窓からはライトアップされた橋、乗用車もひっきりなしに行き交うのがみられた。北京や上海など大都会を除いて「中国の夜は真っ暗」のイメージが払しょくされる。



8月4日 真新しい黄色のステーション

午前4時頃に目を覚ます。雨が激しくガラス窓を打ち、風も強い。朝食を済ませ、8時30分に出発。低く垂れこめる黒い雲は、現地にも恵みの雨をもたらしているのだろうか。

車窓に流れる赤褐色の岩山を眺めながら1時間半、8kmもの長い長いトンネルを抜けると内モンゴル自治区だ。ひまわり畑が点在し、道路標識もモンゴル語併記に変わり、目的地が近付いてきたことを実感する。

12時40分、新たに完成した「中国科学院烏蘭敖都村荒漠化試験站」(ステーション)に到着する。ここでも雨が降ったようだ。中庭通路のコンクリートの水たまりに映る太陽がまぶしい。

「センベノー」(こんにちは)。真新しい鉄の門の前で爆竹の歓迎をうけたあと、蔣徳明試験站长から歓迎のあいさつを受ける。昼食後の自己紹介では、最後の緑化支援ツアーとあって、元代表の故川鍋祐夫先生やステーシ



ンを管轄する瀋陽応用生態研究所教授の南寅鎬先生(今年7月12日逝去)を偲び、20年間の思い出を交えながら、それぞれ自己紹介を述べる。

「5年前に来た時、羊の解体の一部始終を見せていただき、その素晴らしい技を日本の専門誌で紹介した。今回は、その時見逃した、血のソーセージの作り方をじっくりとみたいと思う。植樹に加えてこれが私の今回のツアー参加の目的の一つなので、わがままを許していただきたい」と私。秘かに

計画していた目論見を表明し、正式に皆さんの了解を得る。

休憩の後の緑化セミナーでは、われわれ一行と蔣試験站长、獣医師のハルバラ・オヨン夫妻、老小さんら牧民らとともに、今年春(4月14~20日)に実施した緑化事業の成果(オボ山と日立の森に障子松・云杉・山桃・柳など6100本を植樹)と、20年間、20万ムーに及ぶ緑化活動を検証した。

この中で蔣試験站长は「20年の間に中国経済は発展した。このステーションには新しい建物も完成した。日本の皆さんのこれまでの資金援助と作業に対して政府、中国科学院、旗、地元民に代表してお礼を述べたい」と謝辞。そのうえで20年を振り返り「最初の10年間は試行錯誤の連続だった。何の樹木をどのように植えたらよいか分からず、せっかく植えても活着率は50%に満たなかった。しかし、ここ10年は地下水の汲み上げ用のポンプが導入され灌水が容易になり、苗木も良くなった。この結果、活着率は85%にもなっている」と報告した。

さらに「皆さんの活動成果に触発されて2004年から旗政府の資金が沙地緑化事業に投入されたこと、1戸当たりの飼養頭数が羊30頭、牛15~20頭に制限されたことなどから、この地域の緑が増えてきた。政府の事業は単年度ごとに行われるが、今後も続く見込みだ。30年後には砂漠はなくなるという計算もある」と明るい見通しを披露した。

この後、オボ山に登り、杏、山桃、ポプラ、障子松などの生育状態を確認した。オボ山から見る景色は、5年前に比べより緑が濃くなったような気がするし、とりわけステーション周辺はこんもりとした森となっている様子に見とれた。

8月5日 モンゴルの「ブーダン・ノール」

ステーションの朝は早い。加齢のせいばかりではない。朝は空気がひんやりしてすがすがしい、寝坊をしてはもったいないという気になる。このツアー恒例という乗馬、南先生伝授の気功体操を行う。朝食のあと南先生追悼の植樹(樹種は「杜」)。南先生には5

年前にお会いした際に、流暢な日本語で中国における少数民族の話、ステーション開設当初の牧民の生活について伺った記憶がある。穴を掘りながら、冥福を祈る。

草方格づくりへ出発。太陽光線を全身に浴びながらの作業は結構きつい。休憩時に砂丘に登り、いま作業を行った場所を見下ろすと全体のほんのわずかでしかない。引き続き継続していく必要性を感じながら砂丘を駆け下った。今後は地元の力に期待することになるのだろうか。



ソルガム畑の視察。このソルガムは青樹会の支援による種子を播種したもの。2m以上に草姿を見て、「順調に生育している」と家畜飼料の専門家である窪田さん。あと2週間で刈り取り、乾草に調製して牛の飼料として利用するという。窪田さんは「リン酸、カリ成分を施肥するともっと良い。何も金肥でなくてもよい。半年くらい発酵させた畜ふんを1畝あたり3~4t入れるとよい」とアドバイス。

昼食時に「今日の午後、羊の解体を行う」

とのことが、孟さんに耳打ちされる。いよいよ待望の時が来た。皆さんは小学校の訪問、草方格づくりを行っている最中、羊の解体作業と調理、血のソーセージ作りが行われるのだ。

中国内モンゴル自治区の遊牧民は、羊や牛を飼育しているが、祭事や来客があると羊を自家と畜して、ふるまう。羊肉は大ぶりの骨付きで塩ゆでというシンプルな調理で食卓に上る。内臓類はもちろんと畜・放血の際に流れ出る血液も一滴も無駄にせずソーセージにして食するのが、モンゴル族の流儀。「1頭丸ごと食べる」のは、フランスのシャルキュトリーの思想に通じるところがあるように思う。

ハルバラさんがナイフ1本のみごとな技を見せてくれた。浦井さんが興味津津で初めて解体現場を見学した。浦井さんは最初緊張した様子だったが、ハルバラさんが解体しながら助手の人と「羊はどこの部位がおいしいか」と議論しているのを見て次第に表情を和らげていった。



ハルバラさんが左右の最終肋骨が交差する鳩尾（みぞおち）部の毛を掻き分ける。真っ白な下毛の下の表皮にナイフを入れる。6cmほど切り開き、真皮、皮下脂肪層、腹膜を切り進む。血も出ないし、内臓が飛び出してくることもない。そこでハルバラさんは、いま切り裂いたみぞおち部に腕を差し入れる。その瞬間、羊がほんのちょっと動いたかのように見えたが、その後は微動だにしない。心臓の大動脈を探りあて指で切ったのだ。外観からは見えないが、血管から出血し、胸腔内に溜まっていくはず。

腕を引き抜く。指先に血液がちょっと付いているだけで、見た目には何も付着していない。助手の人は胸腔内に溜まっていく血液がみぞおち部から流れ出さないように、羊の体を上向きに保定する。皮と脂肪層の間に拳（グーの形）を入れ、力づくで皮を剥ぐ。内臓

抽出の後、胸腔溜まっている血液は1滴も残さないように、茶碗で汲み取る。これから先の解体の詳細は5年前にこの緑化ツアーに参加した時にレポートした(「青樹会会報」No.57 2009. 6. 19)ので省略するが、今回は血のソーセージの作り方を簡単に紹介する。“ソーセージ職人”はハルバラさんの奥さんオヨンさんだ。

凝固が始まっている血液に細かく刻んだニンニク、パクチー、スパイスを入れ、そば粉を加えて練り合わせる。と畜時にとりだした大腸・小腸の裏表をひっくり返し内容物を除去、きれいに洗う。これをケーシングとして使う。練り上げた血液は羊肉の茹で汁で硬さ具合を調整し、漏斗でケーシングに充填。40~50センチメートルごとに糸でしばる。入れる野菜の量やスパイスは各家庭によって差があるようだ

加熱調理は水から。いきなり高温の湯に入れるとパンクしてしまうから。70~80℃で20分くらい、浮いてきたら「血のソーセージ」の出来上がり。

フランスの有名な血のソーセージ「ブーダン・ノワール」は豚の血液、モンゴル族のそれは羊の血液と違いはあるものの、モンゴルの「ブーダン・ノワール」といってもいい。ちなみに、モンゴル族は単に「チャンスン・グデュス=ゆでたソーセージ」と言い、ごく普通の家庭料理だそうだ。羊肉のソーセージを作る家庭もあるようだが、孟さんは知らなかったほどで、チャンスン・グデュスといえば血のソーセージを指すのが普通ようだ。

その日の夕食はもちろん、羊料理、塩ゆでした骨付き羊肉、同じくゆでたレバー、ハツ、血のソーセージが並べられ、羊を丸ごと堪能したのは言うまでもない。締めは、茹で汁かけご飯。これがまた絶品。茹で汁には旨味成分が溶出しているので肉そのものよりうまいと思った。風が吹けば桶屋がもうかる式に言えば、羊を烏蘭敖都村で堪能できるのは青樹会の活動のお陰だ。会員の皆様さんに感謝!!



8月6日 豆腐のチーズ「紅腐乳」

乗馬、気功体操の後、この日も朝食におかゆをいただく。ステーションでもホテルでも朝食のおかゆのお伴(具、調味料?)で一番のお気に入り「腐乳」(ふにゅう、フウルウ)。腐乳は、脱水した豆腐に麴をつけ、塩水中で発酵させたもの。白や青もあるようだが、私の好みは赤。紅麴(べにこうじ)を使用して発酵させた紅腐乳(ホンフウルウ)あるいは紅麴腐乳(ホンチューフウルウ)。これが沖縄に伝わって「豆腐よう」の基になったといわれている。豆腐のタンパク質が適度に酵素分解され、旨味成分のペプチドやアミノ酸を生じる。これはまさしく「チーズ」である。

チーズと同じように好き嫌いがはっきりしている食品で、私のようなウオッシュタイプの「臭いチーズ」やブルーチーズ、シェブル(ヤギのチーズ)が好きな向きにはこの紅腐乳はたまらない。もちろん、後日立ち寄ったスーパーで自分用のお土産として買い求めたことは言うまでもない。

この日は政府が実施した40万畝にも及ぶ大規模な草方格づくりを行った「芳都絨穿公路両側沙地総合治理」事業の現場、牧草地、水田の視察。1組、8組、日立の森の現地確認と続く。印象に残ったのが日立の森で蔣試験局長が言った言葉。「ここは砂から土壤に変わりつつある」。「日立の森」はポプラが10m近くの高さに育ち、灌木が生い茂り、素人目



にも、長年にわたる青樹会の植樹活動の成果がはっきりと分かる場所といえる。10年後、20年後にもう一度来てみたい。



村を去る最後の晩は荣誉賞授与式に続き、地元住民と一緒に焼き肉、焼きそばを楽しむ。

8月7日 オボ山からみる景色

夜明け前にオボ山に登る。烏蘭敖都村の日の出と村の景色を網膜に焼き付けておきたいという気持ちからだ。同じ思いなのだろう。中川さん、野上さん、立野さん、岡田さん、浦井さんも登ってきた。5時過ぎ、真っ赤な太陽が地平線の霞の中から頭を出し始める。日本で見ても中国で見ても同じ太陽のはずだが、別の太陽に思える。

朝食は水ギョウザ。ギョウザには旅立っ人の安全を祈る気持ちがこもっていると聞き、ステーションの賄いの方々的心遣いに感謝!!



最後のスケジュール「牧民との懇談会」から、参加者の一言を紹介する。

西さん 20年間お世話になった。毎回、村人たちと会えるのが、植えた木がどうなっているのが楽しみだった。大変感謝している。月日

が経つうちに村人が減ってきたのが残念だが、世の中の動きなのでしかたがない。

都築さん 立派な宿舎もできたし、緑も増えた。久しぶりになつかしいお顔に再会できてうれしい。歳なので次はないかなと思っているが、日本に帰って何かできることがあるのではないかと考えている。

ハルバラさん 皆さんと知り合って15、16年経つ。たくさんの支援を受けたし、仲良くなった。いま感謝の気持ちでいっぱい。会えなくなると悲しい。植えた木や草方格をみると、皆さんを思い出さることだろう。機会があればまた来てほしい。



ラオショーさん 植樹は成功した。最初はだれも見向きもしなかったが、駆り出されて作業に加わり、だんだん周囲の緑が増えたことで、村民はありがたく、感謝している。最後といわずにまた来てほしい。

岡田さん 今朝オボ山に登ってみた。十数年前に比べ村の緑が広がった感じがした。村の人たちでこの活動を続けてほしい。

野上さん 黄砂が降るところに生まれ育ち、その黄砂が飛んでくるところはどんなところなのかと思いやってきた。緑と暮らしが豊かになることを期待している。

石川さん 村民との交流があったからこそ、植樹活動が続けられたと思う。私たちのやってきたことが少しでもお役に立ったのならうれしく思う。

立野さん 5回ほど参加しているが、来るたびに風景が変わり、道が覚えられないほど。緑も増えた。私とオヨンさん、岡田さん、ハルバラさんは年齢がつながっていることが分かり、不思議な縁を感じる。

押田(照)さん 植樹がどれだけ効果があるのか、客観的な判断がほしい。かつて日本にかなりの黄砂が飛んできたが、ここ10年くらいは大したことがない。「貧者の一灯」のように多少は沙漠化が止まったのかなと思う。少しは効果があったのなら、地元の人たちが今後も努力してほしい。



中川さん 第1回から20回くらい来ている。3回目位にオヨンさんに声を掛けてもらい、この村の人は皆さん人懐っこいと思った。この村の発展の仕方が私の故郷と似ている。私は着物の柄の型紙の家に生まれた。どこにでもある技術だと思っても消えてしまう。モンゴル衣装の伝統を大切にしてほしい。

浦井さん 初めて参加したが、どこの国でも人のつながりということが非常に大切だと感じた。

押田(敏)さん 20年、40回目の緑化支援ツアーの今回で一端終わりにすることにした。その間、川鍋先生、南先生が亡くなり、われわれの仲間も亡くなった。月日が経った感じがする。われわれの団体としての活動は終わるが、国民運動のような広がりになるよう期待したい。

こうして20年、40回、延べ参加人数500人のぼる活動は終わった。

タラハチベナ（ありがとう）、パイエスタ（さようなら）。後ろ髪を引かれるような思いで別れを告げ、赤峰、フフホト経由で西安へ向かう。空からみる地上の風景はほとんど茶色だ。川が少なく、山には木がない。日本がいかに水に恵まれ、緑が豊かかを改めて思い知らされる。代わりに見えるのが風力発電用の風車だ。赤峰からフフホト、フフホトから西安への航路の下には、風車が連なっていた。中国の空の上で、日本のエネルギー問題を考えた。



8月8～9日 西安観光

2日間にわたり中国陝西省の古都・西安市の観光。兵馬俑、玄宗皇帝と楊貴妃が遊んだ温泉地「華清池」、大雁塔、小雁塔、碑林、阿倍仲麻呂記念碑、歴史博物館、城壁と巡り、中国4000年の歴史にただただ圧倒されるとともに、1400年も前に空海や阿倍仲麻呂がよくぞ遠く日本からやってきたものだと感心する。



■8月10日 おまけの1日

西安から北京経由で帰国のはずが、とんだハプニング。本州に上陸した台風11号の影響でわれわれの乗るCA183便がキャンセル。航空会社の手配・負担で北京空港近くのホテルに1泊することになった。同じ料金でおまけがついて、よろこんでいいやら。翌日CA183D便でともあれ怪我や事故にあわず全員無事に羽田空港に到着。お疲れ様でした。

3. 内モンゴルの羊を肉羊に転換

この夏にツアーに参加された長野の窪田さんから「内蒙古の羊について」の寄稿がありましたので、紹介致します。

1. 羊の飼育方式の転換

内モンゴルは長い間、遊牧民によって羊を野草地に放牧して飼養していたが、旱害と過放牧により羊の食べる草は殆ど無くなるまで草地が沙漠化し、遊牧民は放牧による飼育は不可能に近くなってきた。この対策としてトウモロコシ、ソルガム、牧草を栽培して給与する方式でないとならば家畜の飼育は出来なくなると心配していた。

私は5~6年前から牧草の試作やソルガムの栽培について見本園を設置して、この普及を図ろうとしたが、牧民は殆ど飼料作物については実行しなかったが、今回、ステーション滞在中に予め約束していた二人の方が来訪し、お話をする機会に恵まれました。二人はソルガム、アルファルファの栽培により肉羊の飼育を実施するとのことで、4時間に渡って、お話の出来たことは本当に有意義であり、是非、成功するよう願っているところです。

肉羊の飼育について主要なことについて2~3の項目を記述したい。

2. 肉羊の飼育

内モンゴルの羊は長い間 遊牧し、品種の改良等は行われていなかった上に、遊牧中の草の不足と冬期間はトウモロコシの実を取った稈を給与する程度で栄養不足になり、春先、子供が生まれる頃になると栄養不足で流産することが多くなった。その上、品種改良がないため、毎年、身体が小さくなってきた。先日、雄羊を肉にするため秤量したが、60kg程度で、改良された肉羊は100kgであるから、体重が半分程度で、これでは羊毛の量も少なく、羊の飼育で農業経営をすることが困難になってしまう。



杜泊種羊(オーストラリア原産)

お話をしたウリジスルンさんはオーストラリアから杜泊種羊を導入に成功し、年1回しか出産しないのが普通であるが、この品種は2年間で3回出産することで、子羊を肉羊に飼育して出荷することに自信を持っている。



窪田定一



ウリジスルンさん



3. 肉羊の飼育目標

(1) 事業環境

①内モンゴル政府は、経済発展の方向として肉羊出荷目標を年1000万頭とし、このため

補助金、技術支援を計画している。

- ②アルホルチン旗はアルファルファの都とし、牧草や飼料作物を安価に仕入れする計画である。
- ③中国も所得の多い消費者は、食肉の安全性や味の良い肉を求めており、生産地や生産者の表示や信頼性が求められている。
- ④消費者の健康意識が強くなり、脂の少ない高級羊肉を志向している。

(2)事業内容

- ①オーストラリアから優秀な肉用種を導入し、年1回の出産を2年3回の出産を目標とする。
- ② 合作社を作り、牧民と共同で土地を利用し、蒙杜羊(肉用種)を育てる。
- ③ アルファルファ、ソルガムを合作社で栽培し、乾草、サイレージ等で給与する。
- ④ 牧草の多収をはかるため、散水施設を設置して、羊を輪牧する。
- ⑤ 早害に強い桑を植栽する。桑の葉は栄養価が高く、羊が喜んで食べる。
- ⑥ 肉用種で合理的な飼料給与によってブランド化して、高付加価値とする。
- ⑦ 飼料作物の栽培に堆肥を施用しなかったが、これからは堆肥を畑に施用して、早害を防ぐと同時に良質の飼料を生産し、給与する。
- ⑧ 旨い、安心安全な羊肉を生産し、消費者に説明し、旨いシャブシャブを普及する。
- ⑨ 中国で、ナンバーワンの美味しい羊を作る。
- ⑩ 今後は、羊のふん(堆肥)を畑に施用して、良質多収の飼料作物を栽培し、羊に適量を給与するような、循環型経営を目指す。



桑の葉

(3)飼料作物の栽培

日本の畜産は子供のうちは一部を放牧するが、大部分は牧草や青刈トウモロコシ、ソルガム等の飼料作物を栽培し、青刈給与、サイレージ給与、乾草給与の3本柱で成り立っている。

沙漠地帯では野草がないので、飼料作物を栽培し、家畜を飼育することが基本である。以下、その主要な作物について記述してみたい。

①アルファルファ

アルファルファとは最良の飼料と言う意味で、ご婦人方にご存知のとおり、スーパー等でアルファルファの若芽を販売し、ほうれん草と同じような利用がされている。

<栽培上の要点>

ア 畑の pH は 8

アルファルファは日本のような酸性の畑に栽培しても生育不良となるので、石灰を多量に施用して栽培している。しかし、内モンゴルはアルカリ性土壌のため、アルファルファの栽培適地である。

イ 栽培方法

品種は沢山あるので、アメリカより輸入した種子を種苗店で購入し、利用する。新



アルファルファ

しく栽培するのはアルファルファの根粒菌を接種しないと収量は半減するので、必ず接種を行う。

有機質を必要とするので、堆肥を 10 アールあたり、5 トン程度は施用すること。2 年目以降は化成肥料の追肥とする。堆肥はふんに稲ワラ、麦稈等を混合し、水分 65~70% 程度にして、高さ 1.5m 位に積み、月 2 回程度の切返しをして、4~6 ヶ月間で完熟するので、施用する。飼料作物の栽培には必ず堆肥を施用しないと、多収は望めない。

アルファルファの生育年限は 4~5 年である。また、刈取り回数は年 4~5 回とする。

ウ 利用方法

乾草としての利用が最良の方法である。刈取りした日は 1 日に 3~4 回反転する。3~4 日間で仕上がる。

サイレージに利用する時は、ソルガムまたはトウモロコシ等と混合して利用する。青草としても利用出来るが、半日程度の乾燥後に給与する。

エ 輪作

トウモロコシを 3~4 年栽培し、アルファルファを 4 年程度栽培する輪作方式で行うと良い。ソルガムも同様である。アルファルファは地上部と地下部の根の量が同量なため、アルファルファの後地に栽培するトウモロコシ、ソルガムは堆肥施用と同様な効果となる。

②ソルガム

ソルガムは早害に強いので、内モンゴルのような降雨が少ない所でも栽培が可能である。

ア 栽培の方法

種子は F₁ が多く、収量もあるので、必ず種苗店から毎年、購入すること。品種は沢山あるが、子実型、兼用型、ソルゴー型、スーダン型と 4 種あるが、ソルゴー型が生育も良く、収量も多い。

播種期は 5 月中旬以降であるが、内モンゴルは砂が飛散する時期には播種出来ないのので、6 月下旬頃になる。堆肥を沢山、施用すると砂の飛散が少なくなる。畦幅 70~75cm、株間 20cm 位で、1 本立ち後で、分蘖して 5~6 本になる。

イ 刈取りと利用

草丈が 60~70cm までは青酸含量が多いので、青刈利用は 1.2m 以上とし、半日程度、天日で乾燥し給与する。

乾草として利用するには 1.2~1.5m 程度とする。サイレージは出穂後とし、サイレージの切断は 1~2cm とする。水分が多いので、半日は乾燥して、切断し、詰込むこと。



烏蘭敖都村のソルガム(ウリジ氏)

4. 会員からのたより



<私が村に置いてきた「鶏(とり)の絵」>

今夏のツアーに参加した私は「鶏の絵」3 枚を持参し烏蘭敖都試験場の場長蔣先生にあげてきた。我々の沙漠緑化も 20 年の節目、私は自分が残したいものを村に置いて来たのである。私と鶏との因縁は、遠く戦争中にさかのぼる。

終戦時は旧満州(安東)で小学 4 年生、終戦の時まで鶏を飼っていた。



西 敬史

20羽ほどだったが、曙光と共に木戸を開けて餌をあげる。夕方にも餌をあげて暗くなる前に木箱に入れ、止まり木に並ぶのを確かめ木戸を閉める。好天の時には縁庭に出して遊ばせる。そんな日々を送っていた。

親鶏が卵を抱いて孵化し、一代目とそっくりな二代目の雄鶏ができたことも忘れ難い。無論、戦争の真っ最中。外地に住む私達は、時に先生に連れられ街に出て傷痍軍人の病院を訪れ、「カラスの子」「赤トンボ」や右のような歌で慰問する。それ以外には小学校も社宅内にあったので、どこへ行くこともなく専ら鶏の世話をしていたのだった。

兵隊さんは 勇ましく 海にお空に 大陸に 命ささげて お働き こんなに強い良い国が 広い世界の どこにある 僕らは日本 良いお国

社宅の物知りおじさんから【邂逅】と【喙交】は、言葉の意味は『思い掛けなく出会う』で同じだが、【喙交】は、喙が交わるで、「卵が孵って雛が卵から出てくる時、雛は喙で卵の内から殻をコツコツと叩くのだそう。その微妙な音を聞いて親鶏が同じ処を喙で突いて殻からの脱出を介助する。」との意味だそうである。「もし親鶏が、的を間違えると雛は大きな傷を負う」。何と神秘的で微妙な出会いではないかと、そんな話を夢中で聞いたのだった。一方その頃、エジソンが発明した電球が雛を孵えすとの話を聞き、何とも訳が分からなく奇異に思ったことも憶えている。

さて、あれから 69年。私の勤めていた会社のOB仲間で行っている第6回作品展(6月開催)には、あの昔飼っていた美しい鶏を描こうと、鶏がいないか近辺を探すが見つからない。車で群馬や長野に行っても見当たらない。井の頭自然公園にも行って見たが顎にヒゲを蓄えた珍奇なチャボだけ。本当に、鶏たちは私たちの身边から姿を消してしまったようである。

鶏を写生して、首と腰だけ思い出の金髪に塗ればと思っていた構想は外れ、私の頭の中に残るものに頼って描くしか無いのである。しかし、鶏卵は価格の優等生。鶏たちは人目に付かない所で多量に飼われ、人様の要求に応じているようである。テレビでは、鳥インフルエンザで一度に何百万羽もが処分されている。もはや、日本では人々が鶏を身近にすることは無い、大量生産でないとやって行けないのが日本だ。もう日本には鶏の心が分かる人は殆どいないだろう。そんな鶏たちの変貌、悲運、時の流れを思いながら、この絵はモンゴルの人たちに持って行こう。

大変よくしてもらったハルバラ、ラオショウ、スフの3人にあげようと決めたのだった。ところがである・・・大変お世話になり一番あげたいと思う獣医師ハルバラさんが脳腫瘍の手術で北京の病院へ行くとの情報が、春のツアーから帰国した友人から伝わって来たのだった。

そして8月の夏ツアー、出発前にはハルバラさんが手術を終え村に帰っていると聞いて



いたが、あの不運を聞いた以上、あげる方がよいか、何もわずらわせることなく静かにしておくべきか、私は迷いに迷いながら出発したのだった。そして結局、場長の蔣先生に 3 枚を託したのだった。村に着いた時のハルバラさんは、いつもと変わらぬ笑顔で奥さんと一緒に我々を迎えてくれた。手術についても、私の問いにジェスチャーで両鼻から器具を入れて親指大のものを取り出したと教えてくれた。作業でも私たちと一緒に草方格づくりで力強くスコップを振るのだった。

私の描いた鳥の絵は彼の地に置いて来た。私はそれで十分だった。私が可愛がった鶏たちも、「千の風になって」ならぬモンゴルの風になって、あの悠久の地を飛びまわっていることだろう。そして、私の動きをつぶさに見ながら「オレたちはもっと綺麗なのに、なんだ、あの絵は」とクスクス笑っているに違いないのである。

< 中国情報 >

「日本は違う…」と飛行機を降りた途端に感じた訪日中国人、中国人が見た日本の印象について、中国ネット・XINHUA.JP の記事を紹介しす (8月22日(金)配信)

中国メディアによると、中国国内各地の空港や港などにある出入国審査所で 8月19日、サービス推進活動が展開された。公安部は今後、毎年 8月19日には同様のキャンペーンを行うことを決めている。中国の出入国審査はそのサービス態度が国内外の旅行者から不評を買うことが多く、活動にはそういった悪評を払しょくする狙いがありそうだ。

一方、中国のあるブロガーが最近、日本を旅行した際の感想を紹介する文章を公開した。その内容は以下のようなものだ。

飛行機を降りた途端、「日本は違う」と思った。空港内では人々が順番に検査を受ける。中国人は法の執行者などを見ると誰でもドキドキするが、ここでは日本人の入管職員が全ての人に自分からあいさつし、言葉とジェスチャーで旅行者に指示。その態度は礼儀正しく、丁寧だ。

ガイドさんが日本旅行で必要なことを教えてくれた。その中のひとつは道の渡り方。日本では道を渡る時、絶対に信号を見る必要があるという。その後の数日間、日本のさまざまな街で私は人も車も信号を守り、ルールに従っているのを目にした。中国でよく見る、横断歩道を信号無視で疾走して渡る人は見かけなかった。

では、信号のない道ではどうするのか？ 日本に着いたばかりの時、私はそんな道で自動車が見えたので、自動車に譲ろうとした。中国ではこういう時、運転手は遠慮しない。しかし日本では私が止まると車も止まり、歩行者が通るのをじっと待っていてくれる。クラクションも鳴らさない。私はようやく、ここでは歩行者が優先なのだを知った。それから私は信号のない道では車が来なければ渡り、途中で車が来ても運転手が止まって



くれるというルールに慣れた。

社会全体がこうしたルールに基づいて動くということは、歩行者にとってとても安心だ。国民としても、この国は安心だと感じやすい。人々の安全を守り、災害にも備える。中国の街中では消火栓があまり見られなくなったが、日本ではあちこちにあり、しかもどれも清潔である。